

## 本学教員執筆書籍の紹介

藤尾 均ほか編集 A5判1552ページ

### 新版増補 生命倫理事典

太陽出版 2010年2月発行 税込価格21,000円

藤 尾 均

大学で多かれ少なかれ生命倫理(バイオエシックス)分野の研究・教育に従事してきた筆者(藤尾)ら5名が、当該分野の本邦初の本格的専門事典である『生命倫理事典』の編集作業を開始したのは、今から12年前の1998年の夏であった。爾来、4年以上の歳月を経て、初版第1刷は2002年12月に刊行された。編集委員は筆者のほか、酒井明夫(岩手医科大学)・中里 巧(東洋大学)・森下直貴(浜松医科大学)・盛永審一郎(富山医科薬科大学(現富山大学))の4名であった。

その後、生命倫理分野の進境は著しく、私たちは第1刷刊行後ほどなく、ほぼ全ページを対象とする加筆修正等の検討を開始し、2004年2月には第2刷を刊行した。とはいえ紙数や時間の制約などから、この改訂は中途半端なものとならざるを得なかった。

しかし、ちょうどその前後から、遺伝子操作・移植医療・再生医学等の飛躍的な進展、若者の性意識の急激な変化、ターミナルケアに対する患者・家族の意識の多様化、学校現場における生命倫理啓発教育の推進、医療・保健・福祉制度の相次ぐ変革、世界的規模における自然環境の急激な破壊や汚染、国内外における経済状態の悪化と雇用不安の増大、人種・民族間の血みどろの対立など、生命倫理をめぐる状況はますます複雑化し、分野によっては混迷の度合いを一層深めてきた。生命倫理をめぐる議論は日本社会の将来を展望するうえでますます重要になってきたが、反面、耳慣れないキーワードも相次いで登場した。

そのような背景から私たち編集委員5名は、決意を新たに、こうした社会の需要に応えるべく、『生命倫理事典』を全面的に改訂した全く新しい版の刊行準備を開始した。それは第2刷の刊行と前後する2003年冬のことであった。以来、6年余の歳月をかけてわたしが編集しここに刊行したのが、『新版増補生命倫理事典』である。これは文字どおり、生命倫理に関連する最新・最良の知識を提供できるよう配慮した詳細かつ網羅的な事典である。

今回の新版を旧版と比べると、見出し項目が360増えて1827項目、参考資料(関係法規・宣言等)が13増えて53点、執筆者は62増えて235名、索引項目は7049増えて18231項目となった。読書への手引きともいべき文献案内は、一挙に952件増やして1161件とした。当然ながら定価も高く設定せざるを得なかった。旧版になく新版で初めて立てた項目には、「iPS細胞」「後期高齢者医療制度」「いのちの値段」「ジェネリック医薬品」「インクルージョン教育」などがある。

筆者がとくに作成に力を注いだのは、巻末付録のひとつ「関連年表」である。ここには、紀元前5世紀とされる「ヒポクラテスの誓い」の成立から「核なき世界」主導を理由とする2009年10月におけるオバマ米大統領へのノーベル平和賞授与まで、およそ生命倫理を考える上で必要不可欠な出来事を、約1600項目にわたって収録した。

私たちは本事典を、医療・保健・福祉・環境分野等の現場で働いている方々や専門研究者の方々だけでなく、生命倫理に深い関心を持つ一般学生や一般市民にも広く活用していただきたいと思っている。そのために、各項目の記述はできるだけ平易なものとなるよう心掛けたつもりである。

旧版同様、今回も、斯界の権威の方々から新進気鋭の方々まで、じつに多くの執筆者が編集委員の多種多様な求めに応じて玉稿をお寄せ下さった。この場を借りて各位に心から感謝申し上げたい。むろん、その中には旭川医科大学の関係者の方々も少なくないが、紙数の関係等もあってここでは記載を割愛させていただく。各位の御芳名は事典の冒頭及び当該執筆項目に明記させていただいた。

本事典は、利用者各位の御支援・御協力を得て、さらなる改訂をおこなっていく所存である。お気づきの点を一層御教示いただければ幸いである。

(旭川医科大学 歴史・哲学)